

・・・・・・・・第7回スポじんサロン@京都のご案内・・・・・・・・

日時 2014年12月13日(土)

開催時間 13:30 開場、14:00 開始～17:00 終了(予定)

会場 中京青少年活動センター小会議室 B (ウイングス京都 3階)  
(〒604-8147 京都市中京区東洞院通六角下ル御射山町 262)

企画テーマ「プロレスをスポーツ人類学的に考える」

発表①

「プロレスを研究すること」

岡村正史(ライター、神戸学院大学非常勤講師)

発表②

「体験としてのプロレス“みる、する、まなぶ”一日米での経験から」

塩見俊一(立命館大学非常勤講師)

コーディネーター

遠藤保子(立命館大学教授)

相原進(立命館大学非常勤講師)

## 要録

### 発表①

「プロレスを研究するということ」

岡村正史

1980年代以降プロレスはジャンルとしての衰退を始めるが、その一方でプロレスについての言説は広がりを見せてきた。マニア的関心に加えてプロレスから知的刺激をも受けてきた私は、バブル期に著作活動を開始し、学術的見地からのプロレス研究を提唱してきた。また、現代風俗研究会のワークショップ活動である「プロレス文化研究会」を創設、運営し、多くの研究者を「発掘」し、『現代風俗 プロレス文化』でその成果を発表した。自らも力道山に関する研究で博士号を取得した。一連の活動でプロレスも研究領域であることを認識させることに多少は貢献できたであろう。ただ、「プロレス文化研究会」の参加メンバーの多くは研究者というよりマニアであり、プロレスを語ることのできる数少ない場所として機能している。その熱気はアカデミズムの壁を破る潜在的な力を秘めると同時に、プロレスを研究することの限界をも物語っている。

### 発表②

「体験としてのプロレス “みる、する、まなぶ” 一日米での経験から」

塩見俊一

プロレスを「体験」する、というのは、多くの人にとってはテレビでみたり、スポーツ新聞でよんだり、あるいは会場で観戦したり、ということだろう。このような、リングの「外側」からの視線と、リングの「内側」でプロレスを体験することについて、発表者自身の研究者として、そしてプロレスラーとしての体験を通じて述べたい。まずリングの「外側」で、観客がどのようにしてプロレスにひきつけられているのかという点を、戦後初期日本におけるプロレス生成の「プロ柔道」「柔拳興行」との関係といった実像から検討する。つぎに、リングの「内側」でのプロレスの体験について、映像や画像を交えながら考えてみたい。たとえばアメリカのプロレススクールや、仲間のレスラーと道場で「学ぶ」プロレスとはどのようなものなのだろうか。また、リングのなかで「たたかう」「演じる」プロレスとはどういう体験なのだろうか。このような視座から、「体験」としてのプロレスへの理解を深めてみたい。

## 発表者紹介

### 岡村正史

1991年に編著『日本プロレス学宣言』を公刊。学術的見地からプロレスを語るという立場を示し、当時のプロレス論壇に一石を投じる。同書の刊行以降はプロレスを学術的に研究する活動を継続し、1998年に井上章一（国際日本文化研究センター教授）と共同で「プロレス文化研究会」を設立。2010年に博士号を取得し、博士論文の一部は『力道山—人生は体当たり、ぶつかるだけだ』（ミネルヴァ書房、2008年）として公刊されている。

### 塩見俊一

現在は立命館大学産業社会学部で講師として、スポーツ、武道などに関する講義や演習課目を担当。研究対象は戦後初期日本におけるプロレスの生成であり、「プロ柔道」、「柔拳興行」、「ストリップ」、「女子プロレス」といった、多様な大衆文化との結節にも着目している。一方で、関西地区での興行を中心に、プロレスラーとして活動している。社会学博士（立命館大学）。